



鳥も生あるものなれば、疾う疾う逃げよ。

山椒大夫



Track
4

これは大事なお守だが、
こんど逢つまでお前に預けます。
この地藏様をわたしだと思つて、
護り刀と一しよにして、大事に持つていておくれ。

越後の春日を経て今津へ出る道、珍らしい旅人の一群れが歩いている。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてくる。姉は十四、弟は十二である。それに四十ぐらいの女中が一人ついて、くたびれた同胞二人を、「もうじきにお宿にお着きなさいます」と言つて励まして歩かせようとする。二人の中で、姉は足を引きずるようにして歩いてゐるが、それでも気が勝つていて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折り折り思い出したように弾力のある歩きつきをして見せる。近い道を物詣りにでも歩くのなら、ふさわしくも見えそうな一群れであるが、笠やら杖やらかいがいしい出立ちをしてい

るのが、誰の目にも珍らしく、また気の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の断えたり続いたりする間を通っている。砂や小石は多いが、秋日和によく乾いて、しかも粘土がまじっているために、よく固まっていて、海のそばのように踝を埋めて人を悩ますことはない。

藁葺きの家が何軒も立ち並んだ一構えが柞の林に囲まれて、それに夕日がかつとさしているところに通りかかった。

「まああの美しい紅葉をごらん」と、先に立っていた母が指さして子供に言った。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも言わぬので、女中が言った。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね」

姉嬢が突然弟を顧みて言った。「早くお父うさまのいらっしやるところへ往きたいわ

ね」

「姉えさん。まだなかなか往かれはしないよ」弟は賢しげに答えた。

母が諭すように言った。「そうですね。今まで越して来たような山をたくさん越し